
Japanese little howks

米海兵隊未成年部隊二等軍曹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Japanese little howks

【Zコード】

Z2388P

【作者名】

米海兵隊未成年部隊二等軍曹

【あらすじ】

大きな影が動くアメリカ、ただ運動ができる、ミリオタな日本人の少年が突然、米軍のエリートとして採用！？

しかし、裏ではだれも予想できる規模ではないものが関わっていた・

始まり（前書き）

初めてで、やり方すら分からぬ状況での投稿です。
よければ、コメント等お願いします。
とにかく、暖かい目で見守ってください・・・

始まり

20??年 アメリカ 某ハッカー宅
薄暗い部屋で海外のマニアの間で人気の某アニメの曲が大音量で流れている。

そして、そこに一人パソコンに向つて何かをしている男がいた。
「これで良しと・・・パスワードも権限も奪つた・・・完璧なはず・
・」

男はそうつぶやくと、米軍のネットワークに侵入した。

「これは・・・」

男は何か見つけたようだ。

それは、国防長官の補佐役に送られた極秘のファイルだった。

男はその情報を詳しく見た。

「なんてことだ・・・」

そういうなり、男は電話を手に取り知り合いのウイキリークスの管理者に電話した。

「もしもし、マックスか？」

「そうだが、どうした？そんなにあわてて？」

「今から家に来れないか？」

「きついな・・・あー、三時間後なら手が空く。」

「分かった。できるだけ早く来てくれ！」

CIA本部

一人の新人が上司に報告した。

「失礼します。何者かが米軍のネットワークに侵入したようです。」

「何？」

「また、そのことで至急、会議室に来るようのことです。」

「分かつた。ありがとう、持ち場に戻ってくれ。」

その上司は、急いで会議室に向かつた。

扉を開けると、各部の部長や、幹部が集まっていた。

「失礼します。長官、遅れてすいません。」

長官と呼ばれた、小太りな男は答えた。

「まあ、みんな今来たところだ。気にするなローチ。」「すいません。」

「みんな聞いてくれ、先ほど米軍のネットワークに不正侵入が見られた。こんなことで、いつも会議は開かないんだが、今回はちょっと特殊なケースでね。早い話、知つている幹部などもいると思うが、例のあの話が、知られた可能性がある。」
ざわつく室内

「・・・何？例のあの話つて？」

「よくわからんが、人体実験とかの話らしい・・・」

「いいか！みんなよく聞け！今回の件では、国防長官から犯人を捕まえ、尋問が終わり次第、始末しろという、命令が出ている。今回のことの重大さは分かるな？とにかく、どんな手段を使ってでも犯人が誰かにこのことを話す前に始末するんだ。また、部下の中で理由を追及するものがいたら、アルカイーダのハッキング攻撃と言い訳するんだ。それでもダメなら、一時的に職場から外せ。分かつたな？以上だ。」

「・・・いつたい何が起きてるんだ・・・」

会議終了から約30分後。

「わかりました！不正侵入したのは、カリフォルニアに住む。26歳の男です！」

「こいつか・・・よし、襲撃チームを向かわせろ！」

「待つて下さい！通話履歴から、民間内部通告援助団体のサイト管理者に電話しています！」

「くそ、なら5時間ハッカーを見張らせる！それで、二人同時に始末するんだ！」

「了解！」

ローチは部下から報告を受け、直ぐに長官へ報告した。

「もしもし、長官殿、不正侵入したハッカーを見つけました。」

「よくやった。しかし、状況が変わったんだ。今すぐ始末してくれ。」

「わかりました。しかし、この男がもう一人に電話してこのことを話した可能性があります。」

「何？なら、どんな集団を使ってでも二人を始末するんだ。」

「了解。」

「しぐじるなよ・・・」

某ハッカーの家

「マックスの奴・・・まだかよ・・・

チャイムが鳴った。

「すまん。まつたか？」

「おせえぞ！まあ、いい。これを見てくれ・・・」

「これは・・・なんてことだ！世間が大騒ぎするぞー。」

「だろ、これは国防長官あてに・・・」

チャイムが鳴つている

「たく・・・誰だよ・・・マックス、ここで待つてくれ。」

「分かつた。」

ハッカーは扉を半分開けた。

「どちら様ですか？」「

そこには、警官の制服を着た男が一人立っていた。

「警察の者です。」ここで知らない男があわてて入つて行つたと通報を受けたので・・・」

「ああ、僕の友人です。」

「よければ、その友人を連れてきでもらえませんか？確認をとりたいので。」

男は玄関を開け、警官の制服を着た二人の男を入れた。

「ここで、まつ・・・！」

「・・・動くな。」

扉を開けて眼を離したすきに後頭部に消音器付きの拳銃を突きつけられていた。

もう一人も同じ拳銃を持ち、扉の陰に隠れている。

「おい、どうした？」

サイトの管理者が大声で聞いてきた。

「マックス・・・」

男は小声で呻く。

扉の陰に隠れている男が銃のセーフティーを外した。

「おい！」「

声を荒げて、男は近づいてくる。

「マックス！逃げつ・・・！」

言い終わらないうちにハッカーの頭は撃ち抜かれていた。

「どうしつ・・・」

マックスと呼ばれた男も友人の安否を確認する前に、腹部に3発撃ちこまれ、絶命した。

「よし、近くに未開発の森林がある。そこに死体を隠そう。周囲に気を配れよ・・・」

「わかつてゐる。急げ」

一人の男が死体を処理し、電話した。

「こちら、アルファ1。作戦を無事遂行し、アルファ2とともに帰還する。」

「1)苦労だった。」

男は電話を切り、相方に言つた。

「よし、帰らうぜ。乗れよ。」

「オーケー。行こや。」

男がエンジンをかけた瞬間だった、ドンッ！

大きな音がし、車は爆発、炎上した。

周りには、車の破片が散らばっている。もちろん一人の男の体の一部だったものも・・・

「よし・・・」

偵察衛星から送られてくる映像が映し出されるモニターを見ていた、ローチはうなずき、電話をとつた。

「もしもし？関係者4名確実に始末しました。」

「よくやつた。あとは専門の部署に任せると。」

「了解です。」

「これですべて片付いた。信頼しているぞ、ローチ。君はこの俺が一番信頼してる。決して裏切つたりしないでくれよ・・・」

「ありがとうございます。長官も私を捨てないでくださいね・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2388p/>

Japanese little howks

2010年12月10日07時23分発行